

花鳥風月・短歌

大震災十二年経た東北に

学び南海トラフ備える

徳永 誠一

孫走る愛媛マラソンタイム良く

来年こそは父と並ぶよ

大橋 桃代

突然の友の訃報に啞然とし

長い付き合い今だ信じぬ

佐伯 定則

長下着袖口きつく短くて

亡父の身体いとおしく思う

守谷 肇

足うらに筍感じ早堀す

春はすぐそこ刺し身で食す

越智 和人

リハビリでエール静かに送り出す

小雪降るなか妻を見送る

愛ひとつ受けとめかねて

コーヒーものまず店より帰える

最後かもしれず横浜中華街

音をそろえてラーメンを食う

曾我部 福石

日々の如脳の働きおとろえて

軍歌浮かばず頭なやます

一色 ノブ

新種椿五色の花が狭庭を

自慢満満人招き入れ

久方に里に来てゐる幼な友

共に白髪や長生き祈る

塗堀 良子

銀杏大樹若葉出ておりうすみどり

ニッ葉なれど銀杏の葉なる

加藤 イサ子

男子孫手ごねハンバーク初披露

我「マイウー」やおどろき嬉し

石井 トシ子

葉重ねで十二単衣を表わせり

頭はピンクの椿差す

小林 泰子

啓蟄の蟲を数へて一日を

過ごしていたな少年時代

朧にと島々霞む春の海

船の汽笛のまた二つ鳴る

小田 慶喜

春の色むむと考え迷ふのに

孫はさささと淡き色塗る

綱を持ち春の小川をばしやばしやと

我が子はいつも裸足で歩む

小田 和子